

I 実践

1 研究テーマ

「自他を大切にし、思いやりの心をもって活動する児童育成のための実践の工夫」

—自分の大切さとともに、みんなを大切に—

(1) 主題設定の理由

本校の児童は、元気で明るく素直である。しかし、些細なことから友だち同士でのトラブルや軽はずみな行動などが見られることがある。これらは、学級や友だち同士の人間関係の希薄化、家庭での道徳性の低下などの原因が考えられる。

そのため、学校教育においては人権の知識理解をいっそう深めるとともに、児童一人一人が人権感覚を十分に身に付けるための指導をいっそう充実することが必要である。また、人権教育が目指すものを明確にし、教職員がこれを十分に理解して計画的に進めることも重要である。

そこで、本校では自他を大切にし、思いやりの心をもって活動する児童の育成を研究主題とした。

(2) 研究のねらい

学級を基本として、学校教育全体で取り組むことが重要と考える。そして、自分を大切にする人権感覚を育成することにより、自他を認め合う力を付ける活動の支援をし、人権教育の啓発を図り、思いやりの心と助け合いの心をもった児童を育成することをねらいとしている。

教職員の研修を行うことにより、児童の一人一人についての理解を深めることとともに、人権についての理解と啓発を促し、学校全体で児童の人権教育に当たる。

(3) 実践内容

ア 各教科・領域の学習を通し、思いやりの心を育て、公正公平な態度を養う。

イ 教員研修により、人権意識の高揚と力量のアップを図る。

ウ 異学年交流を通して、思いやりの心を育み、自他の立場や気持ちを考えて公正公平にふるまう態度を養う。

エ 草花の栽培、清掃や奉仕活動を通して、生命の大切さを理解し、ボランティアの精神を養う。

オ 人権メッセージの作成に、保護者への協力を求め人権について考える機会を図る。

(4) 実践例

ア 学級の指導から

1年生では、小学校への入学・学校生活の始まりという観点ではとても大事な学年である。人権を尊重する教育として具体的に友達や自分の良いところをワークシートに書いたり、学級で話し合ったりしていじめや平等・偏見のない友だちの接し方をスキルとして学習を続けてきた。「友だちに優しくしよう」などの内容の題材を用意して、みんなの感情・気持ちを話し合いソーシャルスキルトレーニングとして、どうして友だちに接したらいいのかを考える指導をしてきた。また、「ありがとう」という機会を見逃さず、きちんと言うことができたかどうかを一人一人の児童に訴えながら考える指導をしてきた。その結果「ありがとう」というスキルを多く練習した。友だちに対しての人権、やさしさにつながる「ありがとう」という言葉の実践力につながっていった。

「サンキュー週間」(3日～9日)

・学校全体(道徳)としての取り組みとして、環境委員会が作成

「教室の道徳コーナー」

・道徳公開授業(2学期)



・人権ビデオ視聴から

児童は、今年も1学期に人権ビデオを視聴した。いじめを理解しやすい内容のものとした。題名は「いじめはゼツタイわるい」(1～3年)と「負けるな千太～さよならいじめ虫～」(4～6年)の2本を視聴した。アニメーションのビデオであり自分の身近な出来事のようにとらえることができた。児童は、どの学級でも静かに真剣に視聴できた。普段何気なく言っていることややっていることがいじめにつながり、いじめにあっている子の気持ちが分かり、解決へとつなげる方法が、分かって共感できたのだと思う。児童は皆、「いじめ」は悪いことだということは分かっているが、具体的な内容を見ることで理解が深まり、見て見ぬふりをしていることもいじめであるという感想を持ち、人権に対する意識が高まった。

2年生の児童は、「自分がいじめられたら、先生や大人の人に言ったほうがいいんだなと思いました。友だちがいじめにあっているときに、助けることがいいんだなと思いました。最後に、お兄さんも元々いじめられて自殺していたのが悲しかった。」6年生は、「いじめ虫は、誰にでもいる。だけど、そのいじめ虫を自分の手で止められることが成長だと思うから自分で止められるように努力したい。ビデオを視て自分を見直せてよかった。」4, 5年生も、「私も助けてあげられないかもしれないから、もっと強くなりたいと思いました。」「もし、自分がいじめられたら やめて。と言えるようになりたい。」「これからは、いじめられている人をみたら、助けられる人になりたいと思います。」という感想を書いた。自分だけで閉じこもるのではなく、多くの人の意見や話を聞こうというように気づいてきている。

イ 校内研修の取り組み

本校では、毎年の夏季休業中に人権教育の研修を位置づけている。今年は、夏の人権研修で行われた。櫻井前校長の講演の資料を久慈小の職員分印刷して、8月11日に、補足説明し、短歌については、各学年ごとに担任の先生に読んでもらいながら研修を行った。研修をすることにより、改めて「人権教育」や「いじめ」等に意識を高くもち、児童の教育に当たることができると感想を述べてくれた。特別支援へ在席する児童の交流学級での在り方や居住地交流の受け入れなど、人権教育の大切さを今後もさらに工夫して校内の先生方と一緒に研修を重ね、人権感覚を磨いていけるようにしたい。

ウ 毎週木曜日にゆうゆうタイムが設けられている。学級遊びを主とし、月1回程度で兄弟学年学級での遊びを上学年が中心に考えて遊ぶ。遊びの内容の計画から活動まで熱心に取り組み、上級学年生はお互いが楽しめるように、積極的に面倒をみる場面をみることができた。その他の活動でも兄弟学級で活動することを取り入れている。

エ 学年花壇や一人一人の植木鉢で花や野菜を育てることや各学級で金魚やめだかなど生き物を飼育している。魚に名前を付けたリ水替えをこまめに行うなど世話をしながら、命の大切さについて実感している。ボランティアは、全学年で海岸清掃に参加した。また、卒業式に向けて学級では、プランターで花の栽培をして、思いやりの心が育っている。

オ 人権ポスター、人権メッセージは、夏休みの課題として参加を呼びかけた。各家庭でも人権について子供と一緒に考える機会として、保護者の啓発も図った。優秀作品は人権啓発センターに送った。

3 研究の成果と今後の課題

人権教育についての実践から、各学級の活動や道徳の題材や人権のビデオ視聴などを通して、自分と友だちと深く考えることを多く取り上げて指導し、いじめについても児童の自覚を深めることができた。さらに人権教育は、学校全体や全児童を対象として生活の中で日々行うもので、教師側も一人一人をよく観察し、アンケートを取る、級友調べをする、教育相談をするなどし、児童に対しては、自分からあいさつ、ありがとうを言う、ボランティア活動を行うなど、人権教育を絶えず働きかけて人権意識を高められるように支援してきた。こうした感覚をもつことで人間関係がより良くなっていくものである。これからも継続的に振り返りと指導をしていくとともに、子供から保護者へ、そして保護者や地域の人にも協力してもらい、人権教育の理解と啓発を深めていきたい。